

第1講：75「これが天理や」

おやさと研究所長
永尾 教昭 Noriaki Nagao

本稿では、「おやさま」という呼称についても考察するため、逸話篇中では「教祖」と漢字表記であるが、敢えて「おやさま」と表記する。さて、この逸話の中では大きく2点に注目したい。

1. 神のやしろであることを如実に示した

おやさまのひながたは、中山みき様が神のやしろ、言い換えればみき様の言動がすなわち親神そのものであると如何に人間に得心させるかという道でもあった。当時の信者たちは理屈では理解していても、人間の姿・形であることから、ともすればその教義に素直に沿いきれないこともあった。「おふでさき」には「いまゝてハしんぢつ神がゆてあれど うちからしてもうたがうはかり」（第13号 62）などと、そばにいる者でさえみき様の教えを疑っているという歌が数多い。そして「しかときけをなじにんけんなるよふに をもっているのハこれハちがうで」（第8号 72）と、自らを普通の人間とは違うのだと繰り返し述べられる。

そうした中で、みき様が神であると如実に示す方法を様々に取る。その一つが力比べである。本逸話は、みき様83歳のときのことである。中川文吉の年齢は判然としないが、83歳の老女と素人相撲をやっていた男が腕の握り合いをして、男が音を上げるのであるから相当な力であったと思われる。

逸話篇中、みき様が信者と力比べをする話は68「先は永いで」75「これが天理や」80「あんた方二人で」など計9話ある。それ以外にも、教祖伝や逸話篇には数度に渡る断食、あるいは2人を同時に背負って歩いたといった事実が記されている。

例えば断食で最も長いのは75歳の時75日間、約2カ月半に及ぶ。この間、水、少量の味噌、生野菜のみで過ごしている。しかも断食中、約16km離れた松尾市兵衛宅に歩いて行き、さらに断食後、三斗樽を持ち上げている。三斗樽の重量は約60kgか。驚異的と言ってよい。

話を力比べに戻すと、この逸話では「わしと腕の握り比べをしましょう」と一人称で述べ、あとの方では「わしも…」とは言わず、「親も力を入れてやらにゃならん」と述べ、また他の同様の逸話では「神の方には…」などと述べている。

日本語の特徴として、話者が自分を主語として話す時、「私は」ではなく第三者のように話すことがある。例えば小学校で教師が「皆さんは、今年の夏休みはどう過ごしましたか。先生は…」などと表現することがある。この場合、誰か別の先生ではなく、自分のことである。

余談になるが、これは外国人にはわかりにくい。したがって「おふでさき」英語版では、例えば、「このたびハ神がをもちいあらはれて なにかいさいをといてきかする」（第1号3）は「At this time, I, God, reveal Myself and teach the truth of all things in detail.」となっている。つまり、「神である私が」と訳されている。そうしないと、続く文章で再び「神が」と出てきたら、英語の場合、3人称単数代名詞の「He」（彼が）となり、外国人には神と話者（おふでさきの場合のみき様）が別存在と受け取られる可能性があるからである。

話を戻すと、つまりみき様が多くの力比べにおいて「わしの方には…」と言わず、「神の方には…」と述べているのは、自らが神であることを闡明しているからである。

これは極めて大切な点である。イスラムにおいてムハンマド

は預言者であり、神ではない。仏教において、釈迦は悟りを開き涅槃の境地に至る。キリスト教におけるイエスの立場は、三位一体でイエスすなわち神であるが、その教義を確立させるために公会議を開き決めている。

みき様の場合、力比べの逸話で自らが神であることを物理的な形で示し、加えて自ら神であると述べ、この点で議論の余地はない。

2. 神から親へ

既に述べたように逸話篇の中で力比べは計9篇あるが、本逸話のみ、みき様は自らを親と称する。中川が彼女に会ったのは明治13年であるが、恐らくその前々年ころからみき様は自らをやしろとして顕現した神が親であると述べ、信者もみき様のことをそれまでの「神さま（神さん）」から「おやさま（おやさん）」と呼ぶようになったのではないかと推察される。

人物が特定されて、みき様をはっきりと「おやさま」と呼ぶ例の初出は逸話59「まつり」（明治11年正月）で、山中こいそがそうである。それ以前では情景描写や回顧談の中で「おやさま」の語が用いられているが、「おやさま」と呼ぶのは同7「真心の御供」に例があるだけで、他はすべて「神さん」である。しかし、この7話は人物が特定されていない。つまり誰かが後に述べたとも考えられる。ちなみに、59話でみき様が「をや様」を使っているが、これは親神のことである。

そして、59話以降、逸話篇の中でも信者が「おやさま」と呼ぶ例が増えてくる。「おふでさき」もほぼ同期で、明治12年に書かれた（明治11年は執筆なし）第14号29に「いまゝて八月日とゆうてといたれど もふけふからハなまいかゑるで」とはっきりと、神、月日と変遷し親と名乗ると述べている。（それ以前にも、「おふでさき」には「をや」の語が出てくるが、はっきりと名前を変えると宣言するのがこの時である）。

つまり逸話篇、「おふでさき」を照らし合わせる限り、恐らく明治11年頃から、みき様は自らを親であると意識的に明らかにし、信者もそれまでは「神さま」などと呼んでいたのを「おやさま」と呼ぶようになったのではないかと考えられる。こうしてみき様は、書き物（「おふでさき」）と実生活の中で、この神は親なる神であることを徐々に鮮明にしていったのではないかと推察される。

「おやさま」という語は特殊な言葉である。筆者は、いつ頃から信者がみき様を「おやさま」とお呼びするようになったのか判然としなかったが、こうして見る限り明治11年頃からはと推察することができる。

結び

みき様は、力比べという物理的方法を用いて自らが神のやしろたることを如実に知らしめた。また、「おふでさき」で親神のことを神、月日、をや（親）と呼称を変えていったのに平仄を合わせて、信者はみき様をまずそのまま「神さま」と呼んだ。やがて明治7年に記した第6号で初めて「月日」の語を用い、赤衣を着て自らを「月日のやしろ」と信者に明示する。そして最後に「をや」と記し、自らも親と称し信者も「おやさま」と呼ぶようになっていったのであろう。

こうして当時の信者は、信仰の深化に応じて、親神の属性とともに中山みきという存在に対する理解も深めていったのではないかと推察される。